

富田林市埋蔵文化財調査報告書38

平成18年度

富田林市内遺跡群発掘調査報告書

2007・3

富田林市教育委員会

富田林市埋蔵文化財調査報告 38『平成 18 年度富田林市内遺跡群発掘調査報告書』 正誤表

頁等	訂正箇所	誤	正
P3	表 2 中	畠ヶ田東	畠ヶ田南
P9	32 行目	「布袋リ平〇」	「布袋リ平〇」
P9	33 行目	「布袋ル平〇」	「布袋ル平〇」
P12	18 行目	「布袋レ玉縁〇」	「布袋レ玉縁〇」
P12	21 行目	「布袋ツ玉縁 1」	「布袋ツ玉縁 1」
P12	22 行目	「布袋ツ玉縁 2」	「布袋ツ玉縁 2」
P13	11 行目	「布袋ホ玉縁〇」	「布袋ホ玉縁〇」
P13	11 行目	「布袋ト玉縁〇」	「布袋ト玉縁〇」
P13	22 行目	「布袋タ玉縁 3」	「布袋タ玉縁 3」
P13	36 行目	「布袋ソ平〇」	「布袋ソ平〇」
P14	4 行目	「布袋ソ平〇」	「布袋ソ平〇」
P14	9 行目	「布袋タ平〇」	「布袋タ平〇」
P14	13 行目	「布袋レ平〇」	「布袋レ平〇」
P14	16 行目	「布袋レ平〇」	「布袋レ平〇」
P14	27 行目	「布袋リ平〇」	「布袋リ平〇」
P15	2 行目	「布袋ト平〇」	「布袋ト平〇」
P27	6 行目	同時期に	その後

はじめに

富田林市は、市域の中心を石川が流れ、緑豊かな丘陵と美しい田園風景が調和した自然環境に恵まれたまちです。そのなかでも、中央部の石川とその支流によって形成された平野部は、遺跡も多く存在することから古くから人々の営みが行なわれていたことがわかっています。

しかし、このような事実の蓄積は多くの開発のなかから生まれてきたものであり、発掘調査による新たな発見と引き換えに遺跡の破壊がなされてきたことを看過することはできません。

本書は、平成17年度から18年度に行われた発掘調査のうち、新堂廃寺跡の調査を中心としたものです。調査の結果、講堂や北面回廊など、寺院の規模や構造を知る手がかりとなる発見がありました。

新堂廃寺跡は戦後住宅難の時代に行われた府営住宅の建設地の中にはありますが、先達の尽力もあり一定の保存がされてきました。平成14年には、新堂廃寺跡のほかオガンジ池瓦窯跡、お龜石古墳を含めた一帯が国の史跡に指定されました。市では、この遺跡群を次の世代に引き継ぐための保存整備と活用の方策を、今後数か年をかけて検討していくこととしており、本書に掲載した調査はその計画づくりの基礎となるものです。

最後になりましたが、調査および本書の刊行にご協力いただきました新堂廃寺等整備委員会の諸先生方をはじめ地元住民の皆様や関係各位に厚くお礼を申し上げます。

平成19年3月

富田林市教育委員会

教育長 堂山博也

例　　言

1. 本書は平成16（2005）年度ならびに平成17（2006）年度において、富田林市教育委員会が国庫補助事業として実施した調査の報告書である。ただし、整理作業の都合から、平成17年12月までの調査成果を中心に報告する。
2. 調査は、富田林市教育委員会文化財課が実施した。現地調査は、文化財課課長補佐 中辻亘および同課文化財振興係長 青木昭和が担当した。整理作業は、中辻、青木および文化財課職員栗田薫が行なった。
3. 本書の作成は、平成17年度調査における遺物の項目を栗田薫、その他の項目および全体の編集を青木昭和が担当した。
4. 発掘調査および内業整理については以下の参加を得た。（敬称略）
松本友美、水久保祥子、前野美智子、瀬戸直子、年末亮平、大川健、中野恭平、南修子、飯田夢人
5. 本書で使用する方位は座標北を表示し、標高は東京湾標準潮位（T.P.）で表示した。なお、座標値は、測量法改正前に行なわれた調査成果との整合を図るために、日本測地系を用いている。
6. 本文中に用いた瓦の名称や用語、属性分類については、『新堂廃寺跡・オガンジ池瓦窯・お龜石古墳』（富田林市教育委員会2003年）、『大阪府富田林市所在 新堂廃寺・オガンジ池瓦窯出土瓦の研究』（京都大学総合博物館2005年）に基く。また、現地調査における土色や出土遺物の色調については、『新版標準土色帖』（小山正忠、竹原秀雄編）を使用した。
7. 出土遺物および調査にあたり作成した図面、写真等は、富田林市教育委員会文化財課で保管している。多くの方々の活用を望むものである。
8. 調査にあたり、下記の方々から指導、助言ならびに協力を得た。記して感謝いたします。（順不同、敬称略）
上原真人、大脇潔、北口照美、中村浩、山岸常人、中島義晴（以上、新堂廃寺等整備委員会）、山中一郎、吉原忠雄、古市晃、森屋直樹、土屋みずほ、河内一浩、西光慎治、近藤康司、菅原章太、藤野好博、大阪府教育委員会文化財保護課、大阪府住宅整備課、緑ヶ丘町自治会

目 次

I. 調査状況	1
II. 新堂廃寺跡の調査	4
1. 位置と環境	4
2. 調査に至る経過	6
3. 調査成果 (SH2005)	6
(SH2006-2)	22
4.まとめ	27

挿 図 目 次

図1 調査地周辺図	5
図2 17年度調査区遺構平面図	8
図3 軒丸瓦、重木先瓦実測図	10
図4 軒平瓦実測図	11
図5 丸瓦実測図1	16
図6 丸瓦実測図2	17
図7 平瓦実測図1	18
図8 平瓦実測図2	19
図9 平瓦実測図3	20
図10 平瓦実測図4	21
図11 容器類、埴仏范型、鉄釘穴実測図	21
図12 17年度第2調査区北壁実測図	22
図13 18年度第2調査区平面図	23
図14 讲堂基壇部平面図	25
図15 A～Dトレンチ断面図	26
図16 Cトレンチ平面図	27
図17 想定伽藍およびトレンチ位置図	29

表 目 次

表1 発掘届受理件数一覧	1
表2 発掘調査一覧	2
表3 試掘調査一覧	3

図 版 目 次

図版1 (上) 17年度第1調査区西半部(南から) (下) 17年度第1調査区西半部(北から)	図版6 (上) 北面回廊基壇(北から) (下) Bトレンチ鬼瓦出土状況(西から)
図版2 (上) 溝2および溝3(南から) (下) 17年度第1調査区東半部(北から)	図版7 (上) Dトレンチ瓦敷遺構(北西から) (下) 18年度Cトレンチ(北から)
図版3 (上) 18年度第1調査区(北から) (下) 18年度第1調査区瓦溜(南から)	図版8 17年度調査出土遺物
図版4 (上) 18年度A・Bトレンチ(北から) (下) 18年度Dトレンチ(北東から)	図版9 17年度調査出土遺物
図版5 (上) 讲堂瓦積基壇(北東から) (下) 讲堂瓦積基壇(南東から)	図版10 (上) 17年度・18年度調査出土遺物 (下) 18年度調査出土遺物

I 調査状況

文化財保護法第93条、第94条にもとづく発掘調査の届出、通知は、表1の通りであった。届出件数は平成12年度から減少傾向にあったが、17年度は前年度より39件増加している。

このうち、発掘調査を実施したものの概要は表2の通りである。(1)

またこの他に、史跡新堂廃寺跡等整備計画策定を目的とする史跡地内の確認調査を実施した。

表1 発掘届受理件数一覧（上段：平成17年度、下段：平成18年4月～12月）

	93条			94条			合計	
	発掘調査	工事立会	慎重工事	合計	発掘調査	工事立会	慎重工事	
道路			1	1	1	1	2	3
学校		2		2				2
宅地造成	5			5				5
個人住宅		49	46	95				95
分譲住宅	2	19	25	46				46
共同住宅	1	1		2	1		1	3
その他建物	6	7	4	17		2	2	19
ガス		8	17	25				25
電気						1	1	1
水道						3	3	3
下水道					8	1	9	9
農業関係		1		1				1
その他開発		7		7				7
合計	14	94	93	201	2	9	7	219

	93条			94条			合計	
	発掘調査	工事立会	慎重工事	合計	発掘調査	工事立会	慎重工事	
道路						2		2
学校			1	1				1
宅地造成	2	1		3				3
個人住宅	1	31	13	45				45
分譲住宅			51	51				51
共同住宅	3	1		4				4
その他住宅		1		1				1
店舗	1	2		3				3
その他建物	3	2	1	6				6
ガス		7	19	26				26
電気			6	6				6
水道						8	8	8
下水道					7	1	8	8
電話通信			5	5				5
その他開発		6		6				6
合計	10	52	95	157		9	9	175

表2 発掘調査一覧（上段：平成17年度、下段：平成18年4月～12月）

調査日	所在地	遺跡名	調査面積	調査結果	担当
4月11日	若松町西二丁目	中野	1.26	地表下85cmで遺構を検出。工事内容から遺跡に影響なし	青木
4月27日	川崎町一丁目	桜井	400	遺構、遺物なし	中辻
4月27日	寿町二丁目	毛人谷	27.10	遺構、遺物なし	中辻
4月14日～5月19日	若松町一丁目	畑ヶ丘田	685.00	弥生～平安期の遺物、遺構を検出	青木
6月7日	中野町	中野北	660	遺構、遺物なし	青木
6月16日	富田林町	富田林寺内町	20.00	地表下50cmで遺構を検出。工事内容から遺跡に影響なし	青木
9月30日	甲田五丁目	新家	1600	地盤調査から微量の土器器縫片出土。遺構なし	中辻
12月1日	鍋崎中二丁目	鍋崎南	400	地盤調査から微量の土器器縫片出土。遺構なし	青木
12月6日	若松町西	中野	259	遺構、遺物なし	青木
1月16日～3月31日	緑ヶ丘町	新堂庵寺跡	130.00	(本件掲載)	中辻
1月16日～27日	平野町一丁目	中野北	13800	地表下20～40cmでピット、溝を検出	青木
2月28日～3月21日	若松町一丁目	畑ヶ丘田	28200	地表下100cmでピット、溝等を検出	藤田
3月14日	若松町三丁目	中野	480	遺構、遺物なし	青木

調査日	所在地	遺跡名	調査面積	調査結果	担当
4月10日～9月3日	緑ヶ丘町	新堂庵寺跡	1200.77	奈良～中世の遺物、遺構を検出	藤田
4月14日	喜志町四丁目	喜志	1.44	遺構、遺物なし	中辻
4月17日	中野町三丁目	中野北	2.40	地表下30cmで遺構を検出。工事内容から遺跡に影響なし	中辻
5月29日	若松町西二丁目	中野	7.20	遺構、遺物なし	青木
5月30日	大字須賀	御塩	22.40	遺構、遺物なし	青木
6月14日	喜志町五丁目	喜志西	10.32	遺構、遺物なし	青木
7月10日	甲田三丁目	甲田南	30.00	地表下85cmで遺構、遺物を検出。工事内容から遺跡に影響なし	青木
8月17日	鍋崎北二丁目	寺池	5.40	遺構、遺物なし	青木
8月17日	鍋崎北二丁目	寺池・緑駅	56.35	遺構、遺物なし	青木
9月8日	桜井町一丁目	風ヶ池	390	遺構、遺物なし	中辻
9月11日～12月20日	緑ヶ丘町	新堂庵寺跡	111.00	(本件掲載)	青木
10月17日	若松町西二丁目	中野	10.40	遺構、遺物なし	中辻
11月6日	寺池台一丁目	寺池	20.00	遺構、遺物なし	中辻
11月8日	鍋崎中一丁目	鍋崎	12.48	遺構、遺物なし	中辻
12月7日	寿町二丁目	毛人谷	1000	遺構、遺物なし	中辻

(面積単位：m²)

一方、開発事業に伴う試掘調査は表3の通りであった。

そのうち埋蔵文化財の包蔵を確認した3件については、開発者から文化財保護法にもとづく発見の届出がなされている。

表3 試掘調査一覧（上段：平成17年度、下段：平成18年4月～12月）

調査日	所在地	開発面積	工事内容	調査結果	担当
5月2日	若松町一丁目	409.51	倉庫建設	遺構、遺物なし	中社
5月13日	大字新業 館	113,941.23	施設建設	遺構、遺物なし	中社
6月27日	甲田六丁目	1,218.57	宅地造成	遺構、遺物なし	青木
6月29日	喜志町一丁目	307.69	共同住宅建設	遺構、遺物なし	青木
7月22日	若松町西一丁目	442.42	共同住宅建設	遺構、遺物なし	青木
8月9日	西坂町二丁目	780.27	施設建設	遺構、遺物なし	青木
8月10日	山中町町二丁目	437.50	道路造成	少量の土器器形断片認めるが遺構なし	青木
9月30日	中野町西一丁目	1,566.82	店舗建設	遺構、遺物なし	中社
10月7日	本町	473.14	宅地造成	現況面から45~60cmで地山。地山面で瓦、陶磁器片を伴う遺構検出(本町道路で断続登録)	中社
10月21日	梅の里	1,262.42	保育園建設	遺構、遺物なし	青木
12月1日	川面町二丁目	777.22	店舗建設	遺構、遺物なし	青木
12月7日～15日	大字伏山	60,115.20	宅地造成	遺構、遺物なし	青木
1月17日	五軒家一丁目	3,982.66	宅地造成	遺構、遺物なし	中社
1月20日	大字呑志	2,989.42	校舎建設	遺構、遺物なし	青木
1月20日	加太二丁目	496.74	共同住宅建設	遺構、遺物なし	青木
1月23日	中野町西二丁目	1,178.28	店舗建設	遺構、遺物なし	青木
1月23日	大字東板持	632.61	店舗建設	遺構、遺物なし	中社
2月21日	橋詫台三丁目	259.42	事務所建設	遺構、遺物なし	青木
2月27日	若松町一丁目	2,050.75	公営住宅建設	現況面から約1mで遺構検出(御ヶ原南道路の範囲試大)	藤田
2月28日	什山二丁目	6,089.52	宅地造成	遺構、遺物なし	青木
2月28日	鉢塙北二丁目	334.00	個人住宅建設	少量の土器器形断片を検出したが遺構なし	青木
3月2日	西坂町四丁目	283.38	共同住宅建設	遺構、遺物なし	青木
3月8日	西坂町二丁目	498.95	宅地造成	現況面から約130cmで土器質壁型片等遺物検出(西坂町北道路で断続登録)	青木

調査日	所在地	開発面積	工事内容	調査結果	担当
4月3日	若松町東一丁目	661.16	倉庫建設	遺構、遺物なし	中社
5月29日	西条町一丁目	1,334.86	施設建設	遺構、遺物なし	青木
6月1日	大字佐傳	737.42	集会所建設	遺構、遺物なし	青木
6月7日	南大坪町一丁目	2,233.10	宅地造成	遺構、遺物なし	中社
6月23日	寺町一丁目	1,473.00	共同住宅建設	遺構、遺物なし	中社
7月3日	若松町二丁目	743.72	宅地造成	遺構、遺物なし	青木
7月12日	若松町東一丁目	497.50	貯蔵施設	遺構、遺物なし	青木
7月25日	若松町東二丁目	774.86	工場建設	遺構、遺物なし	青木
8月9日	大字東板持	459.00	産業保養施設	遺構、遺物なし	青木
9月13日	中野町東一丁目	449.77	寺廟所増築	遺構、遺物なし	中社
10月26日	板井町一丁目	1,260.00	福祉施設建設	微弱の痕跡混入を認めるが遺構検出なし	中社
11月24日	中野町東一丁目	1,085.50	工場建設	遺構、遺物なし	中社
11月29日	中野町東一丁目	1,099.85	事務所建設	遺構、遺物なし	中社
12月3日	山山一丁目	2,386.72	宅地造成	遺構、遺物なし	中社
12月14日	甲田一丁目	1,260.06	共同住宅建設	遺構、遺物なし	青木
12月25日	谷川町	721.49	倉庫建設	遺構、遺物なし	中社
12月28日	若松町東一丁目	1,422.00	工場建設	遺構、遺物なし	青木

(面積単位：m²)

II 新堂廃寺跡の調査

1. 位置と環境

金剛、和泉山系から南北に延びる尾根の麓は、一方では起伏に富みながら急峻な風景を示し、もう一方はなだらかに広がる丘陵地を形づくる。その間を石川が北へと貫流している。富田林市はこのような自然地形の上に立地し、その中心は石川により形成された河岸段丘上にある。そして、多くの集落遺跡もまたこの地域に集中している。

富田林市で比較的早い時期に生活の痕跡を見出すことができるのは、中野遺跡から出土した国府型ナイフであり(2)、また錦織遺跡で出土した北白川下層式と考えられる縄紋土器(3)であるが、これらの時代の明らかな営みを確認できる遺構はまだ見つかっていない。

弥生時代になると一変して明瞭な多くの遺構が確認されている。中期には喜志遺跡や中野遺跡、甲田南遺跡などの大きな集落が営まれ、特に前二者についてはサスカイト製の石器製作に関わっていたと考えられている。(4)しかし、後期以降にはこれらの遺跡は衰退し、彼方遺跡、尾平遺跡等石川東岸の丘陵上に小規模な集落（高地性集落）が展開することとなる。

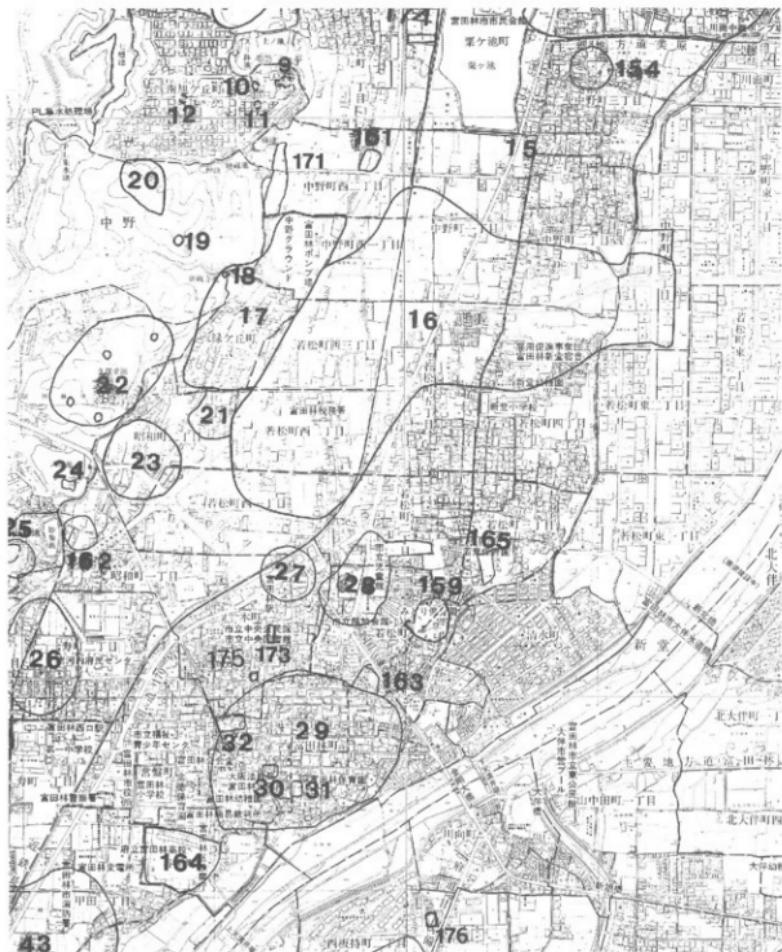
古墳時代前期では、三角縁神獸鏡を伴うとして著名な真名井古墳(5)をはじめ、鍋塚古墳、廿山古墳などが羽曳野丘陵東線に、山中田1号墳、2号墳、板持丸山古墳などが石川東岸の丘陵線に点在する。中期には川西古墳など数基が知られるだけであるが、後期に入ると、西野々古墳群、田中古墳群、嶽山古墳群などの群集墳が見られるようになる。この時期の集落遺跡としては中野遺跡や錦織遺跡、別井遺跡などがあり、輪式系土器も出土している。また、後期古墳である廿山南古墳からは、遠く南アジア以西から伝播されたと考えられる銀層ガラス連珠の出土(6)もあり、この時代には、大陸との深いつながりも想像できる。

このような時代背景のなかで新堂廃寺は創建される。寺院が立地するすぐ西側には羽曳野丘陵の東縁が迫り、その丘陵上には終末期古墳として知られるお亀石古墳が、また丘陵に入り込む谷の斜面を利用してオガンジ池瓦窯が営まれている。これまでの調査で、オガンジ池瓦窯で焼成された瓦は、新堂廃寺の瓦を飾るとともにお亀石古墳の石棺を護るという、瓦という共通の遺物をもって深くつながっていることが分かっている。(7)また、新堂廃寺の伽藍の北側や西側では、大型の掘立柱建物群が確認されており、寺院に関係の深い集落であると考えられる。

わが国に仏教が伝来して間もなく、南河内の地にこういった特異な形での寺院造営が行われたことは、大陸、特に朝鮮半島との間にあったであろう深い結びつきを抜きにしては考え難いと言えるだろう。その他市域では、細井庵寺、龍泉寺などの古代に遡る寺院跡や桜井遺跡、畠ヶ田遺跡、畠ヶ田南遺跡、谷川遺跡などの集落遺跡が知られている。そのうち桜井遺跡は「桜井屯倉」の可能性も指摘されている。

中世以降では、前述の中野遺跡で12世紀から13世紀、錦型遺跡では14世紀代の遺物が出土するなど、集落の展開は確実視されるものの、その動向は未だ明確ではない。16世紀には、現在重要伝統的建造物群にも選定されている富田林寺内町の成立を見る。ここには古くは飛鳥期から小規模な集落が存在したと考えられるが、近世には街としての発展を遂げ、地域の中心として繁栄した。

しかし、市域における考古学的調査はこれまで比較的小規模なもののが多かったこともあり、市域における考古学的な見地はまだまとまりを得ておらず、今後の成果を待ちたい。



- 9 真名井古墳 10 宮前山古墳 1号墳 11 宮前山古墳 2号墳 12 宮前山古墳 3号墳 15 中野北道跡
 16 中野造跡
 17 新堂寺跡 18 オガニジ池瓦窯跡 19 お危石古墳 20 中野古墳推定地 21 新堂瓦跡 22 新堂古墳群 23 新堂山遺跡
 24 六反池古墳 25 毛入谷城跡 26 毛入谷道跡 27 堀ノ内道跡 28 堀ヶ田遺跡 29 富田林寺内町遺跡 30 旧移山家住宅
 31 仲村家住宅 32 石造地蔵菩薩立像 43 甲田遺跡 154 喜志城跡 159 堀ヶ田南遺跡 161 中野西道跡 162 明業遺跡
 163 寺内町北道跡 164 谷川遺跡 165 烟ヶ田東遺跡 171 新堂北道跡 173 御堂道跡 175 本町遺跡 176 西板持北道跡

図1 調査地周辺図

2. 調査に至る経過

富田林市緑ヶ丘町は古くから古瓦が出土することで知られていたが、1936（昭和11）年石田茂作氏の『飛鳥時代寺院址の研究』により紹介され、南河内地域で最古の古代寺院として存在が認められるようになった。

その後、府営住宅の建設計画がもちあがり、1959（昭和34）年には大阪大学によって試掘調査が、翌年には大阪府教育委員会によって発掘調査が行なわれた。

その結果、南北に並ぶ3棟の建物と、その西側に1棟の建物が確認され、この部分を広場として保存した上で住宅建設が行なわれた。（8）

平成に入り府営住宅の建て替えが行なわれることとなったことから、1993（平成5）年以降大阪府教育委員会による発掘調査が行われ、寺域の確定や保存区域の見直しが計られた。また、富田林市教育委員会では一帯を国史跡の指定を受けるため、大阪府教育委員会の調査と並行する形で1998（平成10）年から1か年をかけて範囲確認調査を実施した。各調査成果は脚注に示したそれぞれの報告書や論文を参考にされたい。（9）

これらの成果をもって、2002（平成14）年12月19日にはお龜石古墳、オガジ池瓦窯跡を含め同史跡に指定されたが、引き続き史跡の保存と活用を図ることを目標に、平成17年度には、史跡整備計画の策定を行なう新堂庵寺等整備委員会を設立し、その基礎資料を得るために調査を実施することとした。

委員会の指導のもと、平成17年度は18年1月16日から3月31日まで、平成18年度は9月11日から12月26日まで調査を実施した。なお、この調査は各年度の成果を整理しつつ、今後も数年間をかけて継続して実施する予定である。

3. 調査成果

SH2005

調査地：緑ヶ丘町1604-1

調査面積：130m²

調査担当者：中辻 亘

（1）調査の方法

平成11年度の市教育委員会による範囲確認調査で検出した東方建物の規模等を確認するため、建物の南辺相当部分で、伽藍中軸に対して直交する南北幅約7m、東西長約18mのトレンチを設定し、トレンチ中央の南北方向に土層確認用アゼを残し調査を行った。（第1調査区）

調査区の西半部（西地区）では、地表面から約5cmで遺構面を検出した。一方、東半部（東地区）では地表下約30cmで旧水田面を検出し、水田造成に伴う数層からなる堆積層を除去した後、地山を確認して遺構検出を行った。

なお、西地区で検出した石敷溝および瓦敷溝の延長を確認するために、調査区の南側に220cm×100cmの小トレンチを設定し、その南延を確認した。（第2調査区）

なお、調査後は真砂上で遺構の保護を図った上で埋め戻した。

(2) 遺構

○溝 1

西地区表土直下で黄灰褐色粘質土の堆積層を検出し、精査した結果、調査区北端から約4.6m地点で明瞭な堆積層の区別が確認できた。この区別は調査区の東西方向にはば並行し、さらに調査区東端から5.8m地点で北にはば直角方向に4.5m延びている。このラインの北東部（内側）は黄灰色粘質土のよく締まった堆積土であり、その外側部分はよく締まった暗褐色粘質土の堆積土である。また、このラインから外側に幅約50cmで西隣から南辺にかけて濁黄灰褐色砂混粘質土の溝状の遺構が確認されたが、これは後述する石組溝や瓦敷溝付近で途切れる。以上のことから、溝で隔たれたこの部分は基壇の痕跡であり、その上部には何らかの構造物が存在したと考えられることから、このラインを雨落溝跡と考えた。（図2のL字型に曲がる破線部分）

一方で東地区では、旧地形が西側に比べて一段低くなっている、盛土も30cmと厚く、旧耕土、旧床土、水田造成に伴う整地層が残存していた。調査区南壁での西側表土と東側地山面では約40cmの比高差がある。

旧水田床土下および下層面では、南北方向に斷溝と考えられる溝が数条検出されたことや、西側調査区との比高差を考慮すると、建物の痕跡は削平を受けて遺存していないと判断される。

○溝 2、溝 3

西側調査区南端中央部分で南北に並ぶ15~30cmの河原石が二列並行した溝2（石組溝）を検出した。石列の間隔は約30cmあり、灰褐色砂質土が確認できた。また、この石組溝よりやや東よりの位置で南北方向に4枚の平瓦を隙間なく並べた状態の溝3（瓦敷溝）を検出した。

溝2は建物1の南辺溝に接して南に延びており、調査区を南に拡張した結果、長さ3.6m分を確認した。さらに、検出面から約15cm下がった位置で、北側では1石、南側では2石をほぼ水平に並べていることを確認した。また、溝3は調査区拡張部においてもさらに3枚分の延伸を確認したため、合計で7枚分平瓦を検出したことになる。拡張部で検出した平瓦は、端を5~7cm重ねて並べられており、北から南に向かって緩やかな傾斜をもっている。平瓦は横約32cm、縦約40cmの大きさであり、現地での観察では山田寺式に比定される。（10）

この溝2と溝3には高低差があり、一部断ち割りを行ったところ瓦敷の下に玉石の存在が確認されていることから、石列と瓦敷の間には新旧の時間差があると考えられる。

(3) 遺物

今回の調査で出土した遺物には、軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、垂木先瓦などの瓦類のほか、須恵器、土師器、瓦器、陶器、磁器などの容器類、鉄釘、埴仏の范型、焼土塊、凝灰岩、砂岩、花崗岩、サヌカイトなどの石類がある。それらの総数は遺物整理箱（内寸46.5cm×30cm×13.6cm）で約145箱分である。

それらのうち約97%にあたる141箱分が瓦類で、3箱分が土器類、そのほかの遺物は合わせても1箱に満たない。なお、瓦類については新堂廃寺の遺構を構成するものは、史跡整備のための調査という性格上、一例（第9図：40）を除いて現地に置いている。遺物は、主に新堂廃寺廃絶後に掘削された溝、土塙、ピットなど、廃絶後の層からの出土である。

以下、瓦類、容器類、埴仏の范型、鉄釘の順に記述していく。

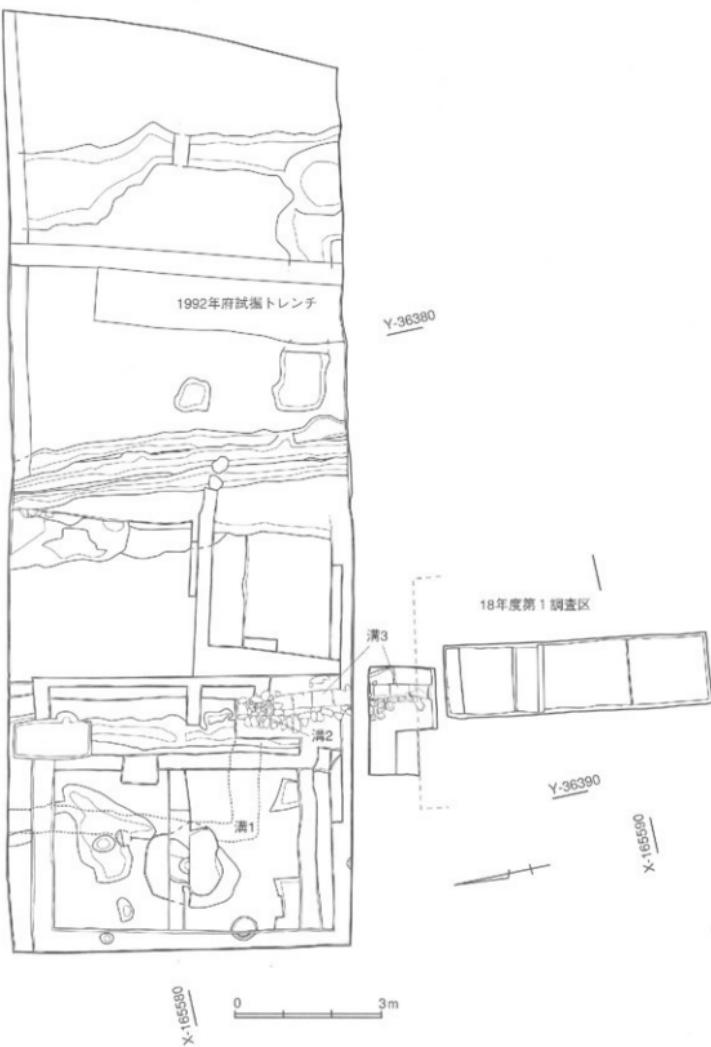


図2 平成17（2005）年度調査区遺構平面図

○瓦類（図3～図10）

瓦類は軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、垂木先瓦が出土している。平瓦の出土量が圧倒的に多く、次に丸瓦が多い。飛鳥期から天平期までのすべての時期の瓦類が出土しているが、天平期に属す瓦類の出土量が多い。本概要では軒丸瓦、軒平瓦、垂木先瓦の報告を中心におこなう。

なお、丸瓦、平瓦については出土量が多く、現在、継続して調査中であり、そのすべてを示すことができない。そこで本書では、丸瓦、平瓦については、すでに新堂廃寺の瓦類のほぼ全貌を公表した『新堂廃寺跡・オガンジ池瓦窯跡・お龟石古墳』（以下『報告書』と記述する）と、その成果に基づく『大阪府富田林市所在 新堂廃寺・オガンジ池瓦窯出土瓦の研究』（以下『研究』と記述する）において確認できていなかった瓦のデータを中心に記述する。

〈1〉軒丸瓦（図3：1～13）

飛鳥期に所属する軒丸瓦B群が1点(1)、軒丸瓦D群2点(2～3)、軒丸瓦E群が1点(4)、白鳳期の「山田寺式」期に所属する軒丸瓦G群が1点(5)、軒丸瓦H群が1点(6)、軒丸瓦F群～H群のどれか不明の外縁部分が2点(7・8)、「川原寺式」期に所属する軒丸瓦J群が2点(9・10)、天平期に所属する軒丸瓦L群が3点(11～13)出土している。天平期の軒丸瓦L群を除いて、ほかは瓦当部だけ残っていない。

瓦当部と丸瓦部との接合にあたっての加工痕跡が分かるものは、「山田寺式」期の軒丸瓦(8)と「川原寺式」期の軒丸瓦J群(9)、天平期の軒丸瓦L群(12)と(13)だけである。すべて丸瓦部広端面にh手法（歯車状加工）が施されていたことが分かる。

なお、天平期の軒丸瓦L群(13)は、瓦当部の残りが比較的よく範囲のない0段階の瓦筋を使用しての製造であることが分かる。(13)は唯一丸瓦部の分かれる資料であるが、凸面にかすかに〔J1b〕らしき縄目印きが観察できるが、凹面の布目は摩滅のため観察できない。

(4・5・6)は東地区東半部南北溝、(2)は東地区第7層、(13)は東地区第6層、(1・10)は東地区第5層、(11)は東地区第4層、(8)は中央アゼ第1層、(9)は西地区第2層、(7・12)は西地区的擾乱層、(3)は西地区的側溝からの出土である。

〈2〉軒平瓦（図4：14～23）

白鳳期の「山田寺式」期に所属する軒平瓦AA2～平瓦II0 Za<ii>群が1点(14)、軒平瓦AA2が1点(15)、軒平瓦AA3～平瓦II0 Za<i>群が1点(16)、軒平瓦AA4～平瓦II0 Za<i>群が1点(17)、「川原寺式」期の軒平瓦AA5～平瓦II0 Za[Bp]群が1点(18)、軒平瓦AA5～平瓦II0 Za<iii>群が1点(19)、天平期に所属する軒平瓦P～平瓦III2 Za「J2aj」群が1点(20)、軒平瓦P～平瓦III2 Za群が3点(21～23)出土している。

「山田寺式」期の軒平瓦AA2～平瓦II0 Za<ii>群(14)、軒平瓦AA3～平瓦II0 Za<i>群(16)、軒平瓦AA4～平瓦II0 Za<i>群(17)は、布袋に「布袋リ平0」を使う。

「川原寺式」期の軒平瓦AA5～平瓦II0 Za<iii>群(19)は、布袋に「布袋リ平0」を使う。

天平期の軒平瓦P～平瓦III2 Za「J2aj」群(20)は「布ツ」を使用している。ほかの軒平瓦は布袋、あるいは布の同定は残りの悪さからできない。

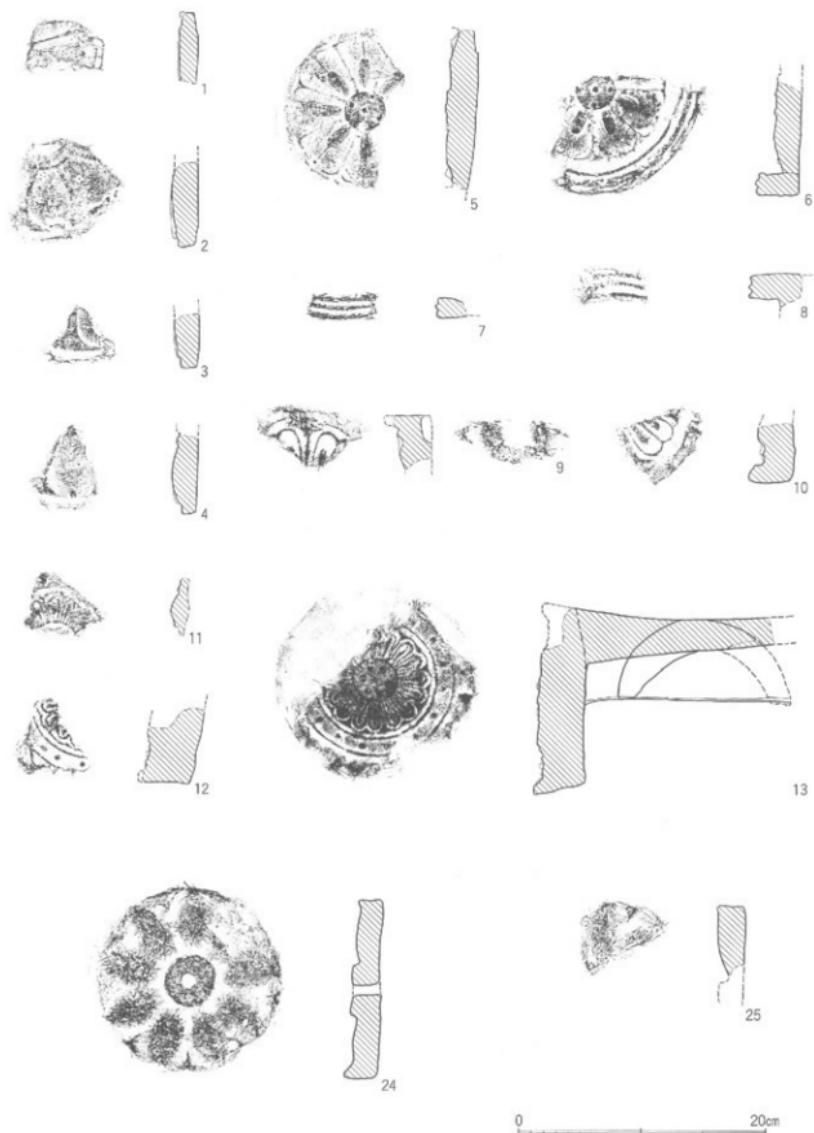


図3 軒丸瓦および垂木先瓦実測図

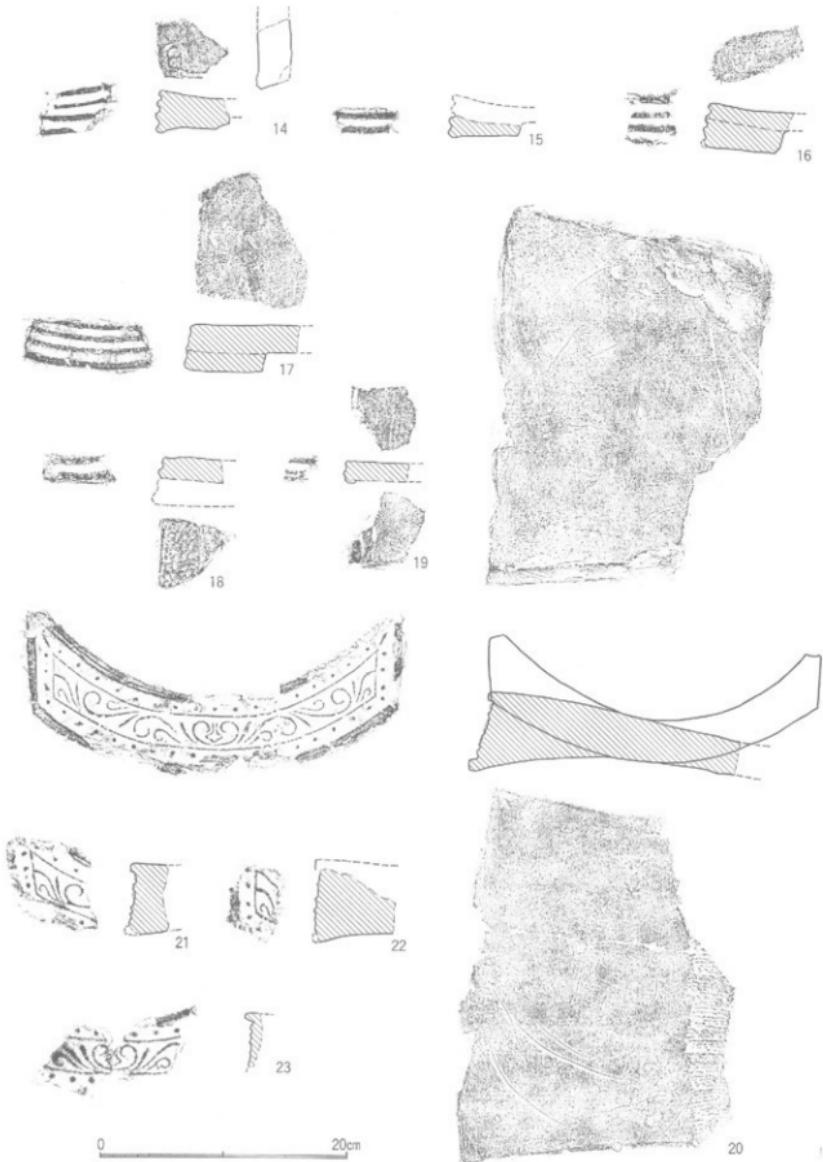


図4 軒平瓦実測図

(17・20)は東地区東半部南北溝、(16・22)は東地区第6層、(23)は東地区第5層、(14)は東地区第3層、(15・18)は西地区第2層、(19)は西地区第1層、(21)中央アゼ第1層から出土している。

〈3〉垂木先瓦(図3:24・25)

飛鳥期の垂木先瓦R群が2点出土している。

垂木先瓦R群は素弁9弁の蓮華紋垂木先瓦で、直径14.8cm、中房形4.28cm、中房での厚さ2.3cmを測る。外縁はなく、中房に蓮子は付けられない。中房の釘穴は、その直径が1.0cmの円孔で、瓦当面側から焼成前に穿たれている。瓦当裏面には時計回りの回転ナデ調整がかすかに認められるが、摩滅が著しい。側面はナデ調整のうちに、ヘラケズリ調整で裏面側には面取りを施しているが、やはり摩滅が著しく、その痕跡は明瞭ではない。

(24)は東地区建物基壇、(25)は西地区西トレンチ内、ピット堀り方からの出土である。

〈4〉丸瓦(図5・6)

天平期に所属する玉縁式の丸瓦で新たに造瓦器具の痕跡が確認された。それらを中心にそれぞれの群ごとに記述する。

玉縁I 322 Za [J1b] 群(図5:26・27)

全長が判明した(26)ほか、新たな型木器具痕跡(26・27)が確認された。ともに型木!3²⁵を使用しての製造である〔『研究』〕。型木の全長は38.0cmで、この型木にも器具痕があることが判明した。型木器具痕は四角形の突出痕で、縦3.9cm、横4.4cmである。器具痕の位置は屈曲点から広端側へ7.0cmに上辺がある。使用布袋は「布袋レ玉縁0」である。(26)は東地区第6層・第7層、(27)は東地区東半部南北溝と第7層からの出土である。

玉縁I 331 Za [J1b] 群(図5:28)

広端部端面にヘラケズリ調整の施されていることが確認された。使用布袋は「布袋ツ玉縁1」あるいは「布袋ツ玉縁2」である。東地区第7層からの出土である。

玉縁I 332 Za [J1b] 群(図6:29・30)

『報告書』で、すでに1種類の型木器具痕跡が確認されているが、今回、別の型木器具痕が新たに確認された。『報告書』で述べた型木器具痕は、2.0cm×(8.0+αcm)を測る長方形板状の突出痕で、玉縁部の上縁から広端側に8.0cmほど下がるところで、なおかつ筒部の屈曲点のすぐ下に付けられていることが分かっていた。今回、長方形板状突出痕と四角形の窪み痕の両方が一つの型木に付けられていたことと(29)、さらに四角形の突出痕も確認された(30)。後者については長方形板状器具痕があるべき片側縁部が欠損しているため、前者のように長方形板状器具痕と四角形器具痕の両方が一つの型木に付けられていたかは確実ではないものの、四角形器具痕の位置は両者ともほぼ同じ位置にあり、前者が窪み痕、後者が突出痕との違いがあるものの、大きさもほぼ同じであることを併せ考えると、同じ器具(装置)の時間差の使用による変異の可能性も想定できる。長方形板状器具痕の取り付け位置は、側縁部にはほぼ沿って、玉縁部の上縁から広端側に8.0cmほど下がるところで、

なおかつ筒部の屈曲点のすぐ下にあたる。大きさは1.8cm×16.0cm測る。その長方形板状器具痕の片側縁部から中央に向かって約3.0cmの位置で、玉縁部の上縁から広端側に11.5cmほど下がるところに四角形窪み痕の上辺がくる。四角形窪み痕の大きさは4.8cm×4.0cmを測る。

ところで、『報告書』で紹介した長方形板状器具痕と、新たに確認された長方形板状器具痕は付けられた位置からみて、異なる型木に付けられた器具痕である可能性が高い。すなわち、『報告書』にみた器具痕は、側縁部から約5.0cm中央に向かっての位置に付けられているのに対して、新たにみつかった器具痕は、側縁部に沿って取り付けられているからである。ただし型木の上下での位置関係はほぼ同じである。この群の瓦を製造するにきわめて類似した型木が2種類以上はあったと考えられる。『研究』では『報告書』で示した器具（装置）の取り付けた型木を、型木I 3 (28)（細）種としたが、今回、新たにみつかった器具（装置）の取り付けた型木は型木I 3 (31)（細）種としておく。使用布袋は(29)が「布袋ホ玉縁0」、(30)が「布袋ト玉縁0」である。

(29)は東地第6層、(30)は東地区中央部南北溝からの出土である。

玉縁 I 333 Za [J1b] 群（図6：31）

『研究』で、新たに設定した一群である。そこでも述べたように、玉縁 I 332 Za [J1b] 群としてまとめられた中に、筒部屈曲部の位置の違いから別の型木を想定する必要が生じた。型木I 3 (30)（細）種としたものである。ここで(31)を例にあげて詳細を記しておく。

(31)は狭端幅14.6cm、玉縁幅10.0cm、連結部の幅1.2cm、玉縁長4.8cmを測る。素材は粘土板で、厚さは1.6cmである。玉縁部を作りつけた瓶形の型木を使う。砲弾形に近い瓶形を呈するため、玉縁部と筒部の境目はほとんど屈曲部をもたない。玉縁部と筒部にあたる一体の粘土板を巻き付けたのち、肩部にあたる粘土を張り足して成形する。肩部と四面屈曲点高の差は6.4cmである。

凹面には、粘土板の重ね目、布目压痕、布袋の縫合せ痕が残る。粘土板の重ね目は「S型」である。調整は施さない③0である。「布袋」には「布袋タ玉縁3」が使用されている。

筒部の凸面は、ナデ調整で叩き目がほとんど消されるが、ナデ目の下に縄目叩き [J1b] を認める。玉縁部には横方向のナデ調整を施すことが分かるだけで、叩き目の痕跡は残っていない。

型木をはずしてからの分割は、凹面側から切り込みを入れて、玉縁部側から広端側に、2つに切断する。そのちには破面調整は施さない②0である。

東地区第7層からの出土である。

〈5〉平瓦（図7～10）

平瓦II 0 Bf群（図7：32・33）

『報告書』の資料では、残存状況が悪かったために大きさが分からなかったが、今回の資料でこの群の大きさが全長39.8cm、広端幅33.8cm以上、狭端幅30.0cm以上を測ることが判明した。また、桶に粘土板を「Z型」で巻き付ける際にしっかりと密着させるための工夫が確認された。重ね日の下面を指で押さえて波状面を造りだしてから重ね合わせるため、重ね目の下面是波状窪み痕として、上面は波状突出痕跡として確認できる。

『報告書』では叩き板の傷から「0段階」と「1段階」を設定したが、(32)は0段階、(33)は1段階である。ともに使用布袋は「布袋ソ平0」である。(32)は東地区東半部上層南北溝、(33)は第

7層からの出土である。

平瓦Ⅱ 0 Bj群(図7:34)

『報告書』に示したデータから変わるものはない(『報告書』:193~194頁参照)。(34)の使用布袋は「布袋ソ平0」である。東地区中央部南北溝からの出土である。

平瓦Ⅱ 0 Bk群(図8:35・36)

全長が約40.5cm、狭端幅30.5cmを測ることが新たに分かった。(36)には円形の窪み痕と長方形の窪み痕が確認された。これは桶Ⅱ 0(23)(細)種とした桶に認められる器具(装置)の痕跡である。円形の窪み痕は狭端部中央に、長方形の窪み痕は狭端部から広端部に向かって6.0cmに上辺が、側縁部から5.0cmの位置に片側刃がある。使用布袋は(35・36)ともに「布袋タ平0」である。(35)は第6層と第7層から、(36)は第6層からの出土である。

平瓦Ⅱ 0 Bm群(図10:41)

『報告書』に示したデータから変わるものはない(『報告書』:195頁参照)。(41)の使用布袋は「布袋レ平0」である。東地区溝1上面からの出土である。

平瓦Ⅱ 1 J1d群(図8:37)

『報告書』に示したデータから変わるものはない(『報告書』:212~213頁参照)。(37)の使用布袋は「布袋レ平0」である。東地区中央部南北溝からの出土である。

平瓦Ⅲ 2 J2ac群(図9:38)

完形品が出土した。全長33.1cm、狭端幅26.1cm、広端幅27.9cmを測る。素材は粘土板で、厚さは2.3cmである。(38)の使用布は「布ウ」である。東地区東半部南北溝と第7層から出土したものが接合した。

平瓦Ⅲ 2 J2aq群(図9:39)

『報告書』に示したデータから変わるものはない(219~220頁)。(39)もやはり手形のような痕跡が広端部側に認められる。(39)の使用布は「布ツ」である。東地区第6層からの出土である。

平瓦Ⅱ 0 Za(i)群(図9:40)

この瓦は東地区の溝3に敷かれていた瓦の一枚である。

平瓦のデータは『報告書』に示したデータから変わるものはない(『報告書』:223~224頁参照)。(40)の使用布袋は「布袋リ平0」である。

平瓦Ⅱ 0 Za(iv)群(図10:42)

平瓦のデータは『報告書』に示したデータから変わるものはない(『報告書』:225~226頁参照)。ただし、桶に粘土板を「S型」で巻き付ける際にしっかりと密着させるための「夫の痕跡が確認で

きた。資料は上に重なる部分で、指で押さえて波状面を造りだした下面に対する反映痕であるため波状突出痕跡として確認できる。(42)の使用布袋は「布袋ト平0」である。東地区中央部南北溝から出土である。

○容器類（図11：1～11）

容器類には須恵器、土師器、瓦器、陶器、磁器がある。

須恵器は壺蓋(1・2)、壺身(3～5)、腺(6)がある。土師器には壺(7)、高壺(8・9)、椀(10)、小皿(11)がある。

(1・7・11)は東地区東半部南北溝、(10)は東地区第7層と第6層、(3)は東地区第6層、(4)は東地区第6層と第5層、(5)は東地区第5層、(8)は東地区第3層、(9)は西地区第2層、(6)は西地区第1層、(2)は西地区側溝から出土している。

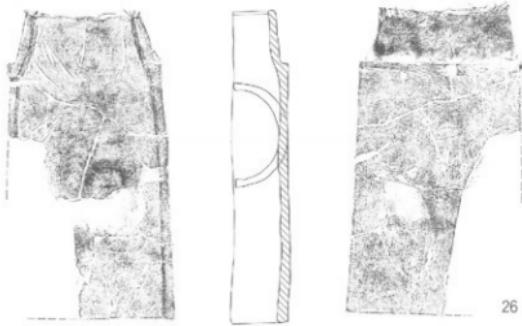
○埴仏范型（図11：14）

富川林市教育委員会の平成9（1997）年度調査で出土した埴仏（『報告書』図版編：図版129・写真167-53）の范型である。埴仏は上半身部分の破片であったため全体像が分からなかつたが、范型の出土によって「如来」の座像であることが判明した。(11)

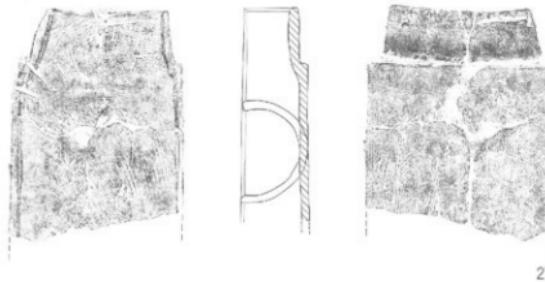
范型の大きさは、長さ4.1cm、残存幅4.3cm、厚さ1.3cmを測る。東地区第7層からの出土である。

○鉄釘（図11：12・13）

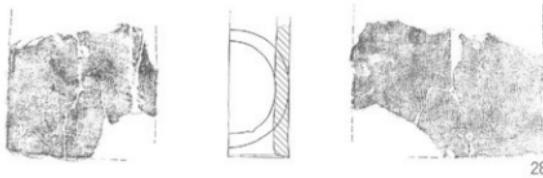
断面方形の鉄釘である。2点出土している。(12)は東地区第4層、(13)は東地区第6層から出土している。



26



27



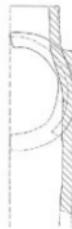
28

0 20cm

図5 丸瓦実測図1



29



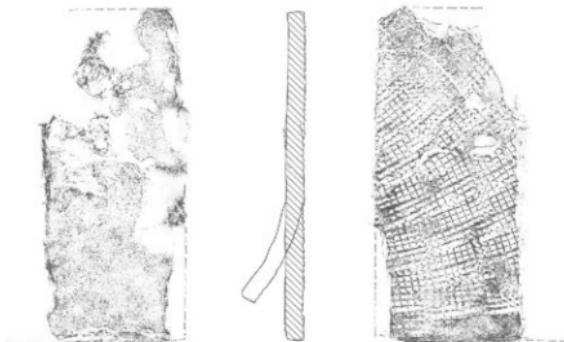
30



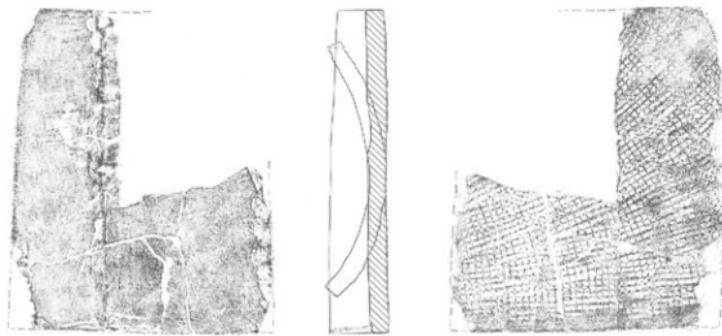
31

0 20cm

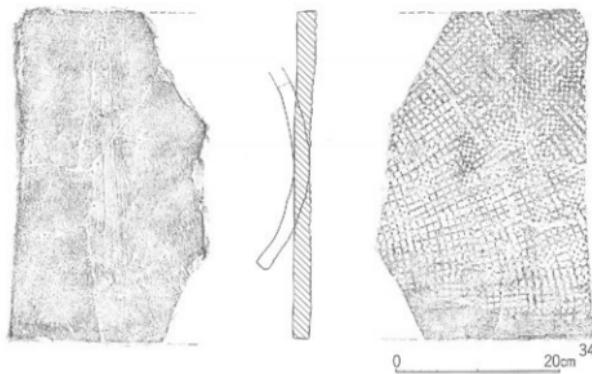
図6 丸瓦実測図2



32

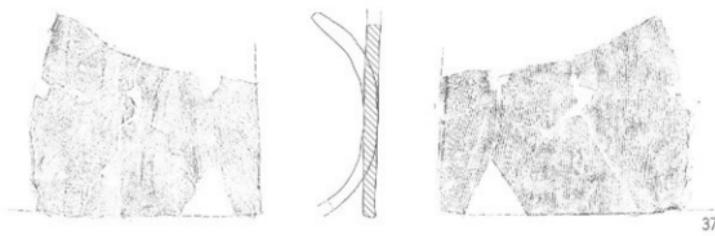
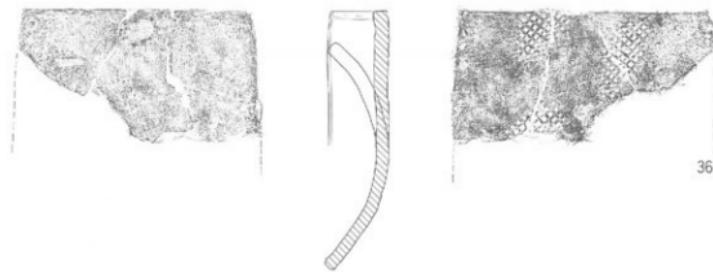
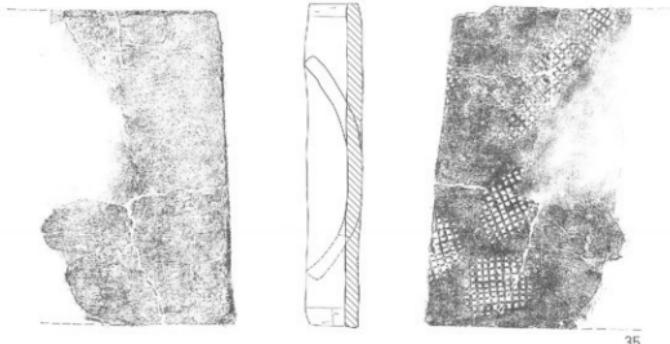


33



0 20cm 34

図7 平瓦実測図1



0 20cm

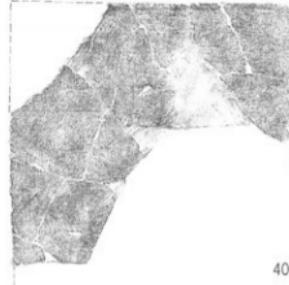
図 8 平瓦実測図 2



38



39



40

0 20cm

图 9 平瓦实测图 3

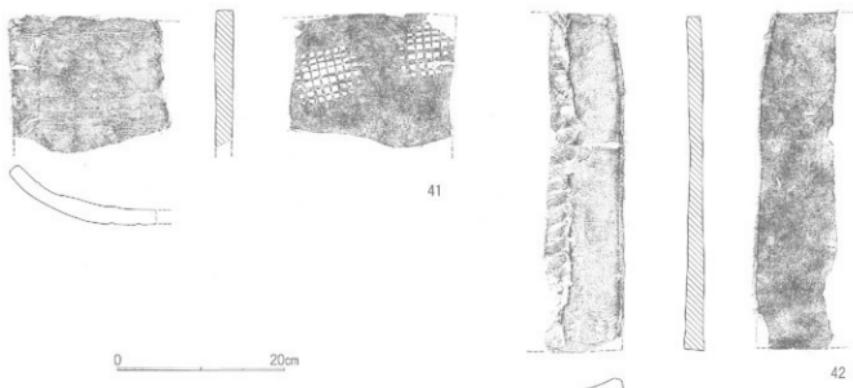


図10 平瓦実測図 4

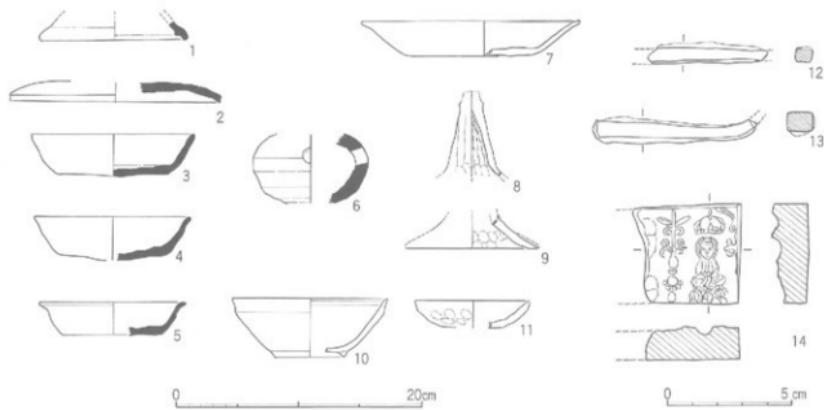


図11 容器類、博仏范型、鉄釘実測図

調査地：緑ヶ丘町1604-1

調査面積：111m²

調査担当者：青木 昭和

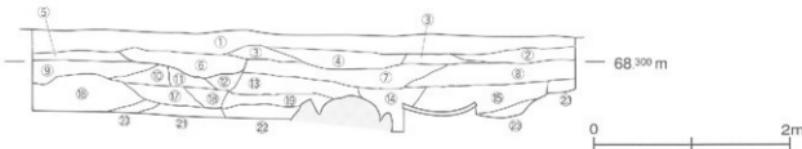
(1) 調査の方法

平成17年度調査区に隣接した地点（第1調査区）と、講堂周辺（第2調査区）の2調査区を設けた。

第1調査区では、平成17年度調査で検出された瓦敷溝と石組溝の南側への延伸状況を確認するため、昨年度調査区の一部を再発掘、拡張するとともに、その南接する地点で東西1.5m、南北5.5mのトレンチ（約8m²）を設定した。

第2調査区は、講堂の東辺および北面から東面回廊への屈曲部が想定される地点にAからDの各トレンチを設定した。なお、Aトレンチについては中央に東西方向の土層観察アゼを残し、北をA1、南をA2トレンチとした。AからDまでのトレンチ面積は計約102m²である。

なお、いずれの調査区も、調査後は真砂土で遺構の保護を図った上で埋め戻した。



- ① 表土 ② 黄褐色砂質土 (10YR3/3) に、灰白色砂質土 (10YR7/1)、明黄褐色砂質土 (10YR6/8) が混じる。
- ③ 黄褐色弱粘質土 (10YR5/8) に、灰白色弱粘質土 (10YR7/1)、にぶい黄褐色弱粘質土 (10YR6/3) が混じる
- ④ 灰色弱粘質土 (Hae25Y6/1) に、黄褐色弱粘質土 (10YR5/8)、浅黄色弱粘質土 (2.5YR7/4) が混じる
- ⑤ 黄褐色砂質土 (10YR6/2) に、明黄褐色砂質土 (10YR6/8) が混じる。少量のマンガン質を含む
- ⑥ 灰白色砂質土 (10YR7/1) と暗褐色砂質土 (10YR3/4) が裂隙状に混じる
- ⑦ 灰褐色砂質土 (10YR6/2) に、褐灰色弱粘質土 (10YR6/1) がブロック状に混じる
- ⑧ 明黄褐色砂質土 (10YR7/6) に、褐灰色砂質土 (10YR6/1) が混じる
- ⑨ 灰褐色砂質土 (10YR4/2) に、灰白色弱粘質土 (10YR7/1)、明黄褐色砂質土 (10YR6/8) が混じる
- ⑩ にぶい黄褐色弱粘質土 (10YR7/4) に、明黄褐色砂質土 (10YR6/8)、褐灰色弱粘質土 (10YR6/1) が混じる
- ⑪ にぶい黄褐色弱粘質土 (10YR7/4) に、マンガン質を含む
- ⑫ 灰白色弱粘質土 (10YR7/1) に、明黄褐色弱粘質土 (10YR6/3)、にぶい黄褐色弱粘質土 (10YR7/4) が混じる
- ⑬ 灰白色弱粘質土 (10YR7/1) に、にぶい褐色弱粘質土 (10YR5/4)、橙色粘質土 (10YR6/8) がブロック状に混じる
- ⑭ 褐黃褐色砂質土 (10YR4/2) に、褐灰色砂質土 (10YR6/1)、黄褐色砂質土 (10YR7/8) が混じる
- ⑮ 明黄褐色砂質土 (10YR6/8) に、褐灰色砂質土 (10YR6/1)、にぶい黄褐色弱粘質土 (10YR6/4) が混じる
- ⑯ 褐黃褐色砂質土 (10YR6/2) に、明黄褐色弱粘質土 (10YR6/8)、褐灰色砂質土 (10YR6/1) が混じる
- ⑰ にぶい黄褐色弱粘質土 (10YR7/4) に、明黄褐色弱粘質土 (10YR6/8) がブロック状に混じる
- ⑱ 褐灰褐色砂質土 (10YR6/1) に、灰黄褐色弱粘質土 (10YR5/2)、明黄褐色弱粘質土 (10YR7/6) がブロック状に混じる
- ⑲ にぶい黄褐色弱粘質土 (10YR7/4) に、明黄褐色弱粘質土 (10YR6/8)、褐灰色砂質土 (10YR6/1) が混じる
- ⑳ にぶい黄褐色弱粘質土 (10YR7/4) に、明黄褐色弱粘質土 (10YR6/8)、褐灰色砂質土 (10YR6/1) がブロック状に混じる
- ㉑ 灰白色弱粘質土 (10YR7/1) に、にぶい黄褐色弱粘質土 (10YR7/3)、黄褐色砂質土 (10YR7/8) がブロック状に混じる
- ㉒ にぶい黄褐色弱粘質土 (10YR6/4) に、にぶい黄褐色弱粘質土 (10YR7/4)、黄褐色砂質土 (10YR7/8) が混じる

図12 平成17年度第2調査区（18年度再発掘部）北壁面実測図

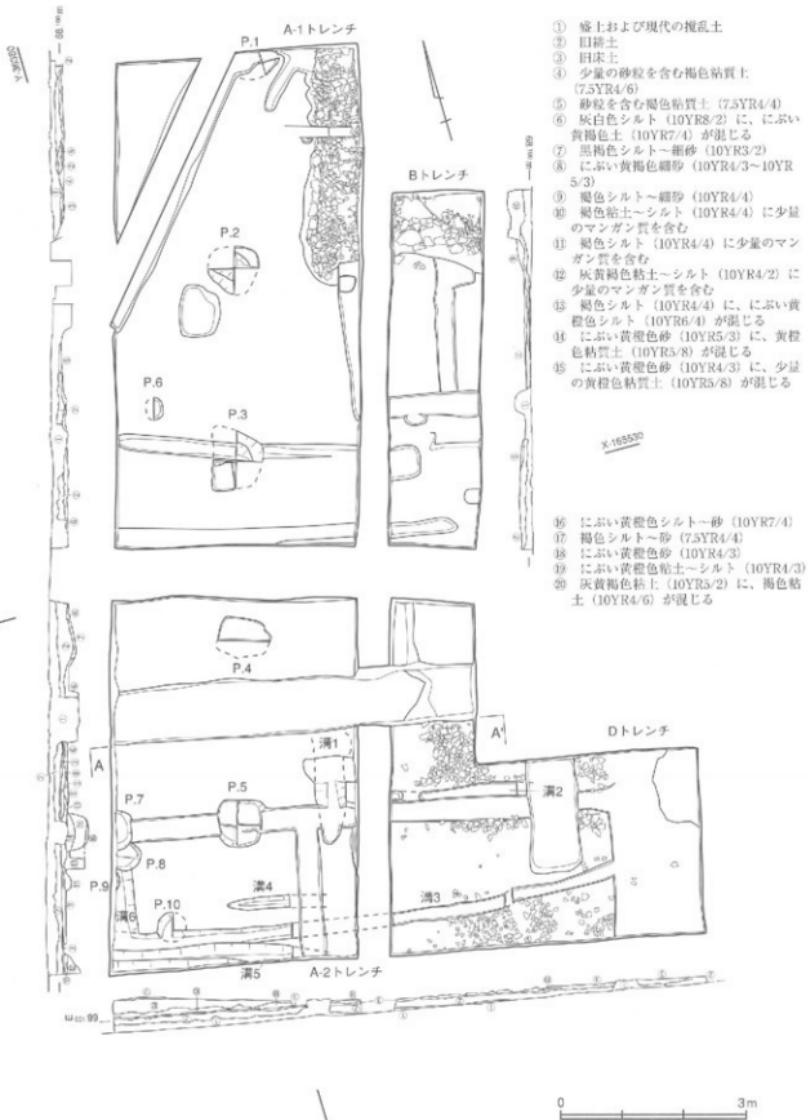


図13 平成18年度第2調査区（A・B・Dトレンチ）平面図

(2) 遺構

○第1調査区（図2）

平成17年度第2調査区の再発掘では南側にさらに平瓦2枚分の延伸を確認し、平成18年度トレンチ北側壁面でその終端を検出したが、それ以南への延伸は確認できなかった。また石組溝は、再発掘部で一部石材の散乱が見られたが、遺構としての確認はできなかった。

平成18年度トレンチでは、南北の中心あたりから南半部にかけて、多量の複数時期にまたがる瓦類が瓦雜に溜まつたような状況が見られた。一部には被熱のためか赤変したものも見られる。しかし、瓦類以外の遺物はごく少量であった。この状況は、昭和34（1959）年に行われた大阪大学の試掘調査における第5トレンチ（今次調査区の南に近接する）の所見に近いものがある。（12）

○第2調査区（図13）

平成18年度第2調査区では、推定される講堂の東辺付近に、まず南北15m、東西4mのトレンチ（Aトレンチ）を設定し規模、構造等を確認することとした。調査を進める中で当初予想したよりも東にすれてトレンチ北東端近くで瓦の集積が認められたため、東側にBトレンチを設けた。また北面回廊の東側延長と東面回廊への屈曲部を確認すること目的に、Cトレンチ、Dトレンチを設定した。

なお、昭和34（1959）年の大阪大学調査における第39トレンチが調査区内に位置するが、今回の調査ではその痕跡を見出すことはできなかった。

〔Aトレンチ〕

A 1トレンチ北端近くでは、講堂の東辺と考えられる瓦積基壇を検出した。基壇としては約3mが確認でき、瓦積も約1.5mが遺存していた。これは、想定される伽藍中軸とほぼ並行している。

しかし、基壇の東には厚く埋積した瓦片を主とする遺物層があり、調査のなかでこれを完全に除去することが躊躇されたため基壇基底部は一部分でのみ確認したが、瓦積の下には石組等は認められず、削りだされた地山上に瓦を積んだような状況である。

基壇に用いられている瓦は、すべて半裁あるいはそれ以上に破截された平瓦であり、所見できる範囲では、ほぼ全てが縄目叩きを持つ天平期に属するものと考えられる。この周辺で出土した瓦も、一部山田寺式や川原寺式のものを含むが、大部分が天平期のものである。

A 2トレンチではこれに対応する遺構は検出できなかったが、トレンチ東端近くに極めて浅い南北方向の溝がかすかに遺存しており、先の基壇の延長ライン上に位置することから、講堂に附属する雨落溝の可能性も考えられる。

またA 1からA 2トレンチにかけて、南北方向に5つの非常に浅い径1.5~2m程度の不整形のビット（図13：P. 1~5）が確認できた。埋土は1層であり、にぶい黄褐色粘土（10YR5/4~10YR7/2）を主体とする。柱痕は見られないが、基壇と平行して約3m間隔で並ぶことから礎石置付跡の可能性も考えられるが、根石等の痕跡は認められない。

さらに、A 2トレンチでは最南部で数条の東西方向に延びる溝を検出しているが、瓦の他に中世以降の遺物が混入しており、寺院廃絶後のものと考えられる。

なお、講堂の北辺および南辺については今回の調査では確認できなかった。

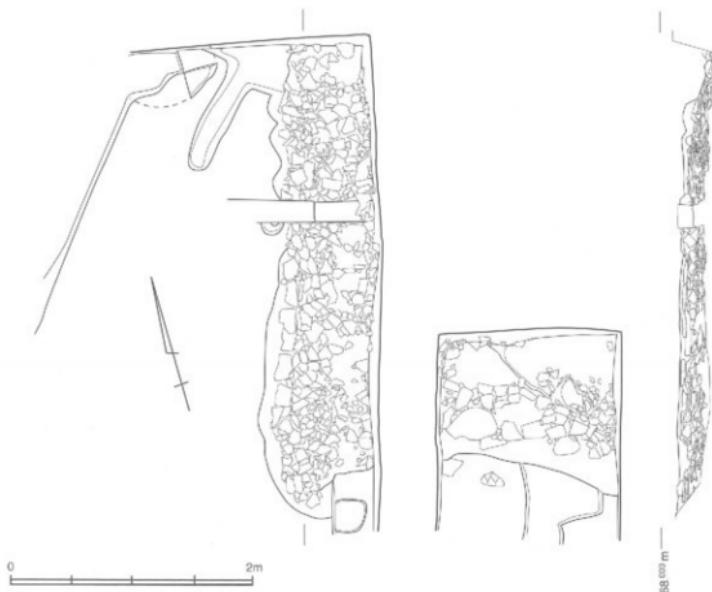


図14 講堂基壇部平面図

〔Bトレンチ〕

Aトレンチで検出した基壇は、その南端で90度屈曲しBトレンチに向いて続く。瓦積は認められなかったものの、瓦積基壇部と同様に破碎された平瓦や鬼瓦を含む多量の瓦の堆積を認めた。

これは、講堂東辺からこれに接続する北面回廊の基壇部であると考えられる。

〔Dトレンチ〕

Dトレンチでは、その西側3分の2ほど（講堂と東面回廊間の一部に相当する）において、ほぼ一面に薄い瓦の堆積を認めた。しかし東側は住宅建設に伴う擾乱などにより失われており、存在を確認することはできなかった。

ここで見られる瓦は、少量の丸瓦を含むが大半が平瓦であり、ほぼすべてが凸面を上にしており、あたかも人為的に敷かれたような様相を呈している。これらの瓦の所属時期は飛鳥期から天平期まで長期にまたがるが、その大半は天平期に属するものである。

また、AトレンチからDトレンチにかけて横断する擾乱（現代の水路跡）では、講堂内外の地山および整地の状況が一部確認できた。（図15）

調査区の西部端では床土の直下が地山であり、そこから東に向かって地山上に灰白色のシルト層が確認できる。講堂基壇の構造がすべて明確となったわけではないが、少なくとも掘り込み地盤などの造成工事は行われず、基壇底部は比較的堅固な地山層をそのまま利用したと考えられる。

一方、雨落溝と考えられる溝（図13：溝1、図15：②）の東側では、軟弱であるが造成の痕跡が伺える。この造成の上に黄褐色を主体とする土壤（瓦片を含む）で整地が行なわれ、前述の瓦敷はこの整地土最上面に敷かれている。

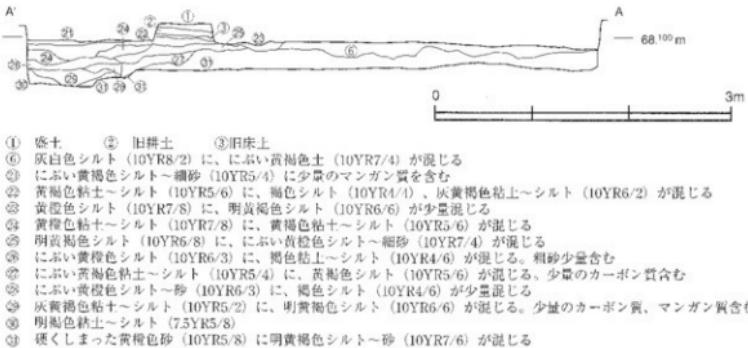


図15 A～D トレンチ断面図

[Cトレンチ]

Cトレンチでは、床土下に石組み列を検出したが、このなかに破損した茶臼が転用されていた。また、その下からは、多量の瓦片に混じって古代から近現代までの遺物が出土した。

最下層では東西方向の溝を認めたが、B・Dトレンチの遺構検出面と比較して約75cm下部に位置していることから、寺院廃絶後の比較的早い時期に水田として造成され現代まで続く耕地であったことが伺える。

(3) 遺物

遺物は瓦類、須恵器、土師器、瓦質土器、陶磁器等があり、取り上げた時点での総量は遺物整理箱で約70箱であった。

現地調査が18年12月末をもって終了したばかりでいまだ整理途中であるため、今年度報告のなかでその詳細は報告することができないが、その一部を写真図版に掲載した。（図版10）

後日機会を得て報告する予定である。

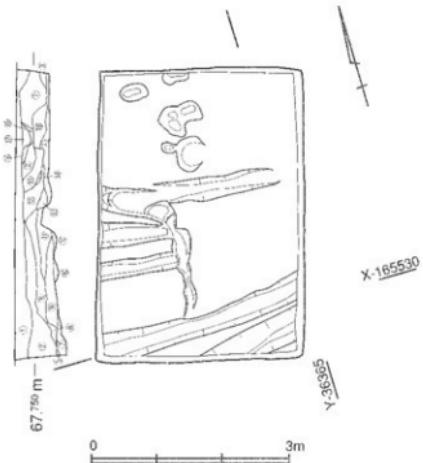


図16 Cトレーニチ平面図

4.まとめ

新堂廃寺は飛鳥期に創建され、中門から一直線上に塔、金堂、講堂が並び、中門から東西に派生する回廊が伽藍を一巡して講堂に取り付く、浜津四天王寺と同一の伽藍配置として認識してきた。

しかし、白鳳期には塔の基壇崩壊を伴うほどの大規模な損傷があり、これまでの調査から「山田寺式」期に塔が再建され、「川原寺式」期に金堂の再建と西方建物の建設、天平期に中門の建て替えとやや遅れて南門の建設が行われたと考えている。さらに西方建物は、南門の完成するころ南北規模を縮小して建て替えられ、同時期に東方建物が建設されたと考えられている。

平成17年度調査で検出した建物や溝は、当初は東方建物および東面回廊に伴う雨落溝と考えた。特に石敷溝（溝2）と瓦敷溝（溝3）には明らかな時期差がみられることや、溝1と溝2とのレベル差から、東方建物の建設とそれに伴う東面回廊の改修に伴うものとしてきた。(13)

しかし、溝2および溝3は伽藍中軸方向から約10度西偏しており、これが東面回廊に伴うものであるなら、その延長は平成18年度調査で確認した講堂東辺に限りなく近づくことから、その後開催した新堂廃寺等整備委員会においても伽藍構造上無理が生じることが指摘されている。

これまでに各地で実施された古代寺院の調査結果からは、地形上の制約等により伽藍は必ずしも正しく方形を呈するとは限らないものの、この遺構が東方建物や東面回廊に伴うものであるとは現段階では言い切れないとして、従前の見解を修正することとした。

この2年間の調査においても伽藍東部が後世の水田造成で大きく削平を受けていることを確認した。非常に困難を伴うであろうが、今後も東方建物や東面回廊の規模、構造を知るための調査が必要である。なお、今回の調査成果が東方建物や東面回廊の存在自体を否定するものではない。

- ① 盛土および現代の堆乱：
- ② 黄灰色シルト～極細砂（25Y6/1）に、にぶい黄褐色シルト～極細砂（2.5Y6/3）、褐灰色シルト～極細砂（10YR5/1）が混じる
- ③ 黄褐色シルト～極細砂（10YR5/8）に、黄灰色シルト～極細砂（2.5Y6/1）が混じる
- ④ 褐灰色シルト～極細砂（10YR6/1）。瓦片多く含む
- ⑤ 黄褐色粘土～汁土（5Y5/1）に、オリーブ灰色粘土～シルト（2.5Y5/1）が混じる
- ⑥ 黄褐色シルト～極細砂（10YR5/6）に、褐灰色シルト～極細砂（10YR6/1）が混じる
- ⑦ 褐灰色シルト～極細砂（10YR6/1）に、明黄褐色シルト～極細砂（10YR6/8）が少量混じる。やや粘性あり
- ⑧ やや粘質の明黄褐色細砂（10YR6/6）
- ⑨ 黑色糞土～シルト（5Y5/1）に、褐色シルト（10YR4/6）少量混じる。やや粘性あり
- ⑩ 褐灰色極細砂（10YR6/1）に、明黄褐色極細砂（10YR6/8）が混じる
- ⑪ 褐色シルト～極細砂（10YR4/6）に、灰褐色シルト～極細砂（5Y5/1）が混じる
- ⑫ 黑褐色シルト（25YR3/1）
- ⑬ 黄褐色シルト（25YR5/1）
- ⑭ 黄褐色シルト（25YR4/1）
- ⑮ 黄褐色シルト～極細砂（10YR5/8）に、褐色シルト～極細砂（10YR6/1）が混じる。やや粘性あり
- ⑯ やや粘質の褐色シルト～極細砂（10YR1/1）
- ⑰ やや粘質の黄褐色シルト～極細砂（2.5Y5/1）
- ⑲ 灰色シルト（5Y5/1）に、褐色シルトから極細砂（10YR4/6）が混じる

X-185530

2695

一方、平成18年度調査では、新たに寺院の規模や構造の一端を知ることができた。

塔、金堂、講堂が直線上に並び、金堂、講堂間に回廊が巡る大和山田寺のような伽藍配置も広義では四天王寺式とされる場合があるが、今回の調査で講堂とこれに取り付く形での回廊の存在が確認されたことは、これまで四天王寺式と考えられていた伽藍配置を確定することとなった。

これまで講堂は、昭和35（1960）年調査で検出された建物南辺および西辺と考えられる遺構⁽¹⁴⁾から、伽藍中軸で反転させた東西約24mの大きさであると推定されていた。しかし、今回調査で講堂は瓦積基壇であったことが明らかであり、昭和35年調査の遺構とは明らかにその構造が異なるものであることから、少なくとも天平期における講堂基壇は、瓦積部から伽藍中軸で反転させた規模である約28mの東西長であったと考えることができる。（図17：破線部）

しかし、今次調査区内で南北長を確認することはできなかった。

基壇に用いられた瓦は、その大半が天平期に属することは既に述べた。しかし、講堂が創建当初から存在し、天平期に基壇外装まで改変するほどの大きな修復があったのか、あるいは創建時には講堂が存在せず相当遅れて天平期になってから建設されたものかは、今回の調査では明らかにできなかった。

今回検出した講堂の基壇外装は瓦のみを平積みし構成されていた。昭和35年の調査において、西方建物が同様の瓦積基壇であったことも知られている。その一方、塔、金堂では、基壇端にわずかに残された玉石列がその上面を平坦になるよう配列されており、これが乱石積であるならば非常に不安定な状況になることから、地覆に玉石を用いた瓦積であったのではないかと想定した。⁽¹⁵⁾

これら塔、金堂の基壇と、講堂、西方建物の基壇における外見上の形式差が、寺院造営の流れのなかで建設時期の違いに起因するのか、建物の性格や重要性による格差であったのかは、今後の検討事項である。

基壇と平行する不整形のピット列は、これまで知られている古代寺院の礎石やその掘付痕と比較しても相応しい規模であるが、基壇端までの距離があまりないという点からこれを講堂建物に関連させることへの疑問もある。いずれにせよ、講堂および回廊の上部構造とも相まって検討を要する事項であり、今後、回廊も含めた広範囲での調査が必要であろう。

今次調査で検出した講堂の東側に敷かれた瓦敷は、平成12（2002）年度調査で塔北側において検出した瓦敷遺構に類似した様相を呈していた。前者については、塔、金堂間に敷かれた参道のような機能を想定したが、今回の瓦敷遺構はその位置から参道とは考え難い。窪地等の足元を確保するため一部に敷かれたものか、建物の周囲一面に敷かれたものかは、狹範なトレンチ調査では判断できないが、これについても今後の調査成果に期待したい。

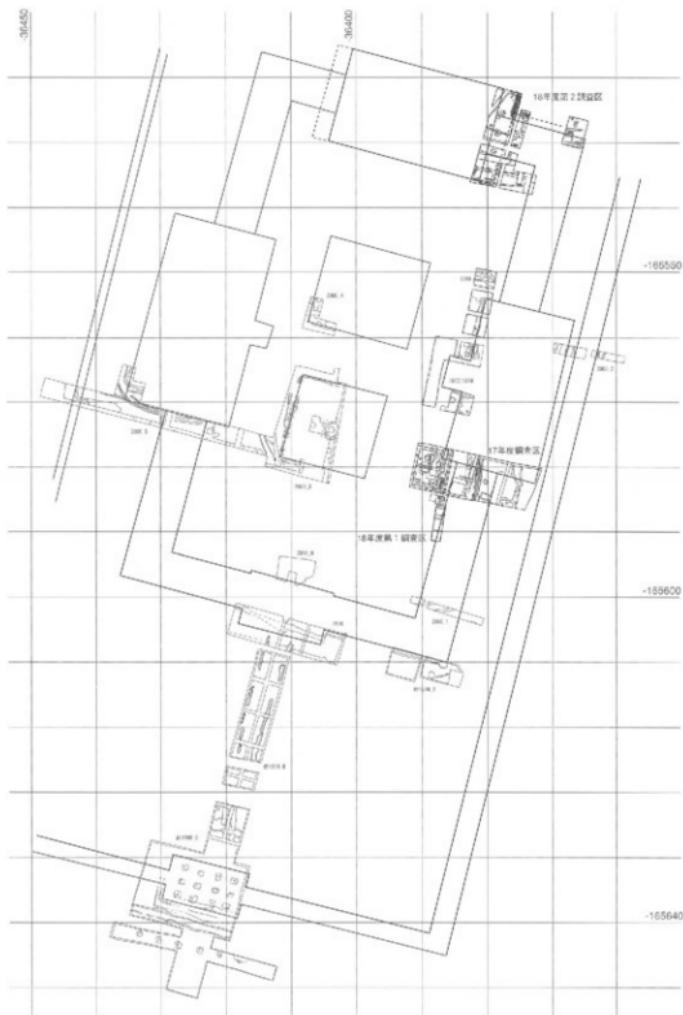


図17 想定伽藍および近年の調査トレンチ位置図

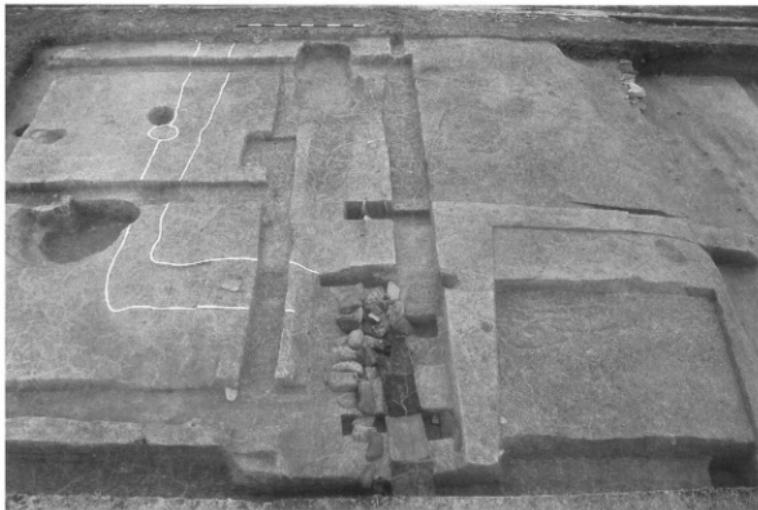
- (1) 中請のあと年度が変わつてから発掘を行なう場合等があり、受理件数と調査件数の計は一致しない。表中に
は国庫補助対象以外の調査を含む。
- (2) 「中野遺跡Ⅲ」富田林市教育委員会1982年
- (3) 「大阪府富田林市鏡織出土の網文土器」渡辺誠（『古代文化 第23巻第3号』古代学協会）1971年
- (4) 「平成7年度富田林市内遺跡群発掘調査概要」富田林市教育委員会1996年 ほか
- (5) 「河内における古墳の調査」大阪大学国史研究室1964年
- (6) 「山南古墳」富田林市遺跡調査会2003年
- (7) 「新堂庵寺跡・オガニ池瓦窯・お龜石古墳」富田林市教育委員会2003年
- (8) 「河内新堂庵寺」大阪大学国史研究室1960年
『河内新堂・鳥舍寺跡の調査』大阪府教育委員会1961年
- (9) 「新堂庵寺発掘調査概要」大阪府教育委員会1996年
『新堂庵寺発掘調査概要Ⅱ』大阪府教育委員会1997年
『新堂庵寺発掘調査概要Ⅲ』大阪府教育委員会1999年
『新堂庵寺』大阪府教育委員会2000年
『平成10年度富田林市内遺跡群発掘調査概要』富田林市教育委員会1999年
『平成11年度富田林市内遺跡群発掘調査概要』富田林市教育委員会2000年
『平成12年度富田林市内遺跡群発掘調査概要』富田林市教育委員会2001年
『新堂庵寺跡・オガニ池瓦窯跡・お龜石古墳』富田林市教育委員会2003年
また、これらの成果とさらなる分析をもとに、栗田薰が「新堂庵寺・オガニ池瓦窯出土瓦の研究」（『大阪府富田林市所在 新堂庵寺・オガニ池瓦窯出土瓦の研究』（京都大学総合博物館2005年）所収）をまとめ
ている。
- (10) これらの平瓦は遺構の一部を構成するものと考え一部を除き現状保存した。そのため、法量は現地で採寸し
たものである。
- (11) 塚が「如来」を像したものであることは、大阪大谷大学教授の吉原忠雄先生のご教示による。
- (12) 「河内新堂庵寺」（前掲(8)）表中に「瓦層は2層。上層は地表に露出し、V・VI式軒丸瓦、重弧文・唐草
文軒平瓦、瓦器。下層はI式軒丸瓦極めて多量。II・III式瓦、鷲尾片も大部分亦変している。中央に瓦片と
石塊の堆積が存在した。旧地表高11.27m。」とある。
- (13) 「史跡新堂庵寺跡発掘調査現地説明会資料」富田林市教育委員会2006年
- (14) 「河内新堂・鳥舍寺跡の調査」（前掲(8)）において「中央建物北方の北一四・五米に高さ二五編の土壇が
認められた。その南辺と西辺の土壇の肩にかすかな凝灰岩掘付痕跡が認められ、ここに一字の建物があつた
ことが知られた。」と報告されている。
- (15) 前掲(7)

報告書抄録

ふりがな	へいせい18ねんど とんだばやししないいせきぐんはくつちょうさほうこくしょ						
書名	平成18年度 富田林市内遺跡群発掘調査報告書						
副書名							
卷次							
シリーズ名	富田林市埋蔵文化財調査報告						
シリーズ番号	38						
編著者名	青木昭和 菜田薫						
編集機関	富田林市教育委員会						
所在地	〒584-8511 大阪府富田林市常盤町1番1号 ☎0721-25-1000						
発行年月日	2007(平成19)年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード 市町村	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
新堂廃寺跡	富田林市 緑ヶ丘町 1064-1	27214	34° 36°	135° 36° 3°	2006.1.16 ~ 2006.3.31 2006.9.11 ~ 2006.12.21	130m ² 111m ²	史跡整備 計画策定 のための 確認調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
新堂廃寺跡	寺院跡	飛鳥時代～中世	瓦積基壇、溝、土坑、ピット等	土師器、須恵器、博仏範型、瓦器、瓦類	講堂とこれに取り付く形の北面回廊基壇を検出した。講堂基壇は天平期に属する瓦を用いた瓦積基壇であった。		

図 版

図版1



平成17年度第1調査区西半部（南から）

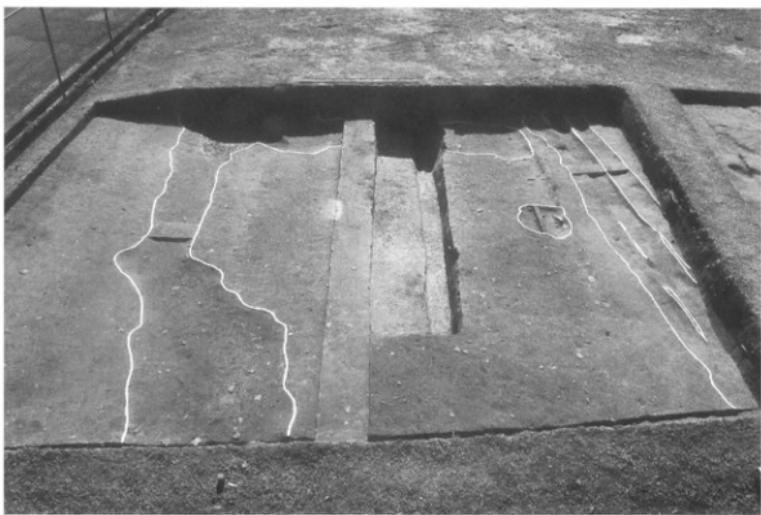


平成17年度第1調査区西半部（北から）

図版 2

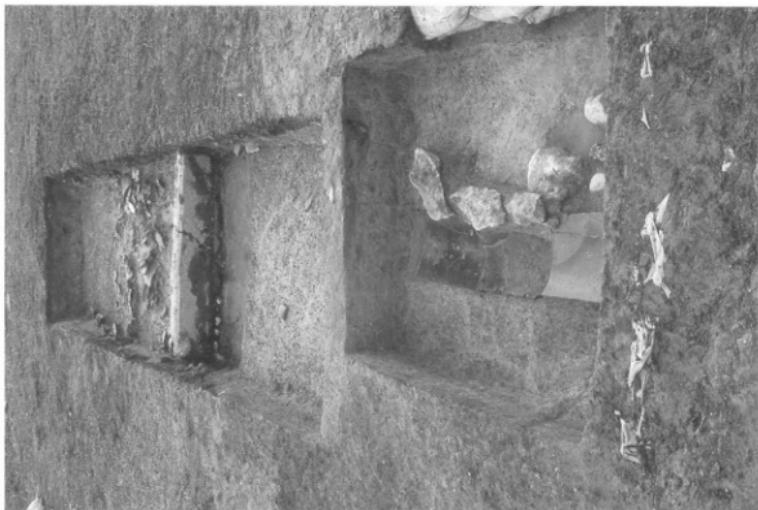


溝2（石組溝）および溝3（瓦敷溝）（南から）



平成17年度第1調査区東半部（北から）

図版 3



平成18年度第1調査区（北から）



平成18年度第1調査区瓦溜（南から）

図版4



平成18年度第2調査区A・Bトレンチ（北から）



平成18年度第2調査区Dトレンチ（北東から）

図版5



講堂瓦積基壇（北東から）



講堂瓦積基壇（南東から）

図版 6



北直回廊基壇（北から）



Bトレーンチ鬼瓦出土状況（西から）

図版 7

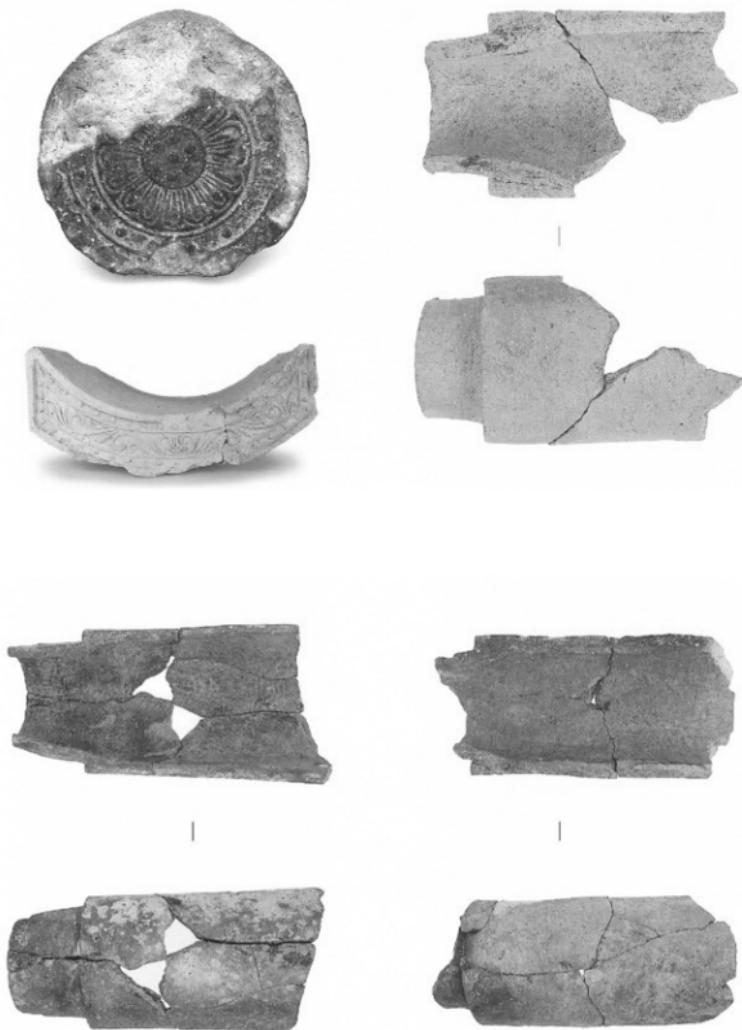


□トレンチ瓦敷遺構（北西から）



平成18年度第2調査区Cトレンチ（北から）

図版 8



平成17年度調査出土遺物（軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦）

図版 9



平成17年度調査出土遺物（軒丸瓦、垂木先瓦）

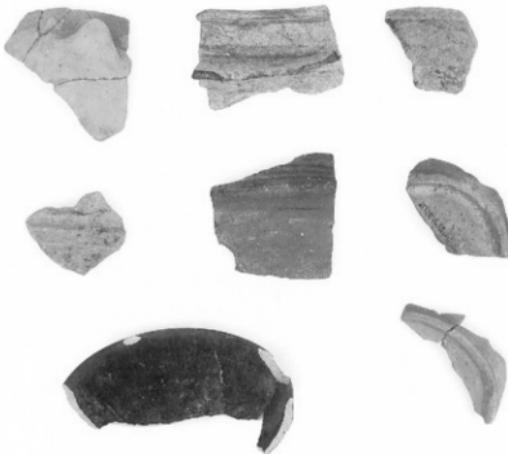


平成17年度調査出土遺物（埴仏瓦型：右は平成9年度調査出土埴仏）

図版10



左：平成17年度調査出土遺物（須恵器、土師器） 右：平成18年度調査出土遺物（鬼瓦）



平成18年度調査出土遺物（容器類、その他の遺物）

平成18年度富田林市内遺跡群発掘調査報告書

発行年月日 2007年3月31日

編集・発行 富田林市教育委員会

住 所 富田林市常盤町1番1号

印 刷 橋本印刷株式会社

2007.300

